

目次

謝辞	iii
アダム・スミスの原著について	v
第一章 はじめに…今なぜアダム・スミスなのか	1
『国富論』は何について書かれているのか	3
スミスの西欧史	8
第二章 適正の十分な証拠…	11
彼の前半生——二九歳直前にグラスゴー大学教授になるまで	11
はじめに	11
アダム・スミスの父	12
母マーガレット・ダグラス・スミス	13
アダム・スミスが受けた教育	14
教授に選任される	19

第三章 初期段階の社会…………… 25

はじめに

スミスの一貫したテーマ

スミスの「市場モデル」

交換モデルとは

社会の起源

人類の四つの時代

スミスの推測

第四章 かくも弱く不完全な生き物である人間…………… 43

はじめに

鏡

公平な観察者

影響を調和すること

ホップス信奉者の悪夢

第五章 統治と法の一般原理…………… 69

はじめに

空位期間とローマの崩壊

封建制度の衰退

憲法で保証された自由	86
第六章 人間の本来の性向——分業と交易 ……………	91
富の創造	92
分業	95
市場の広さ	98
交易	103
交換の交渉	106
交易の交渉	112
第七章 当初の状態が続いていた——商業前の時代 ……………	119
はじめに	119
原始社会における価値	120
混乱の兆候	124
未開社会をはつきり認識する	131
生計費一定の労働理論	135
改良された社会における交換価値	138
第八章 ついに商業の時代が現れる ……………	143
はじめに	143

自然価格と市場価格

賃金

不完全市場

160 148 144

第九章 勤勉な人びとを仕事に就ける……

169

はじめに

変化の積み重ね

商業社会の要素

資本の貯えの起源

資本の貯えの形態

資本としての貨幣

利己主義の有害な結果

189 185 180 175 172 169 169

第十章 生産的な人々のために資金を増やす

—— 経済成長の理論

199

はじめに

純粹なスミスの成長の構成要素

成長の必要条件

生産的労働と非生産的労働

209 208 202 199

第十一章 非常に激しい攻撃——重商主義に対する批判

223

はじめに	223
重商主義の政策	224
輸入制限	228
特別な輸入制限	236
重商主義政治経済学と植民地	241
特許貿易会社	249
植民地貿易と資本のゆがみ	255
第十二章 見えざる手——スミスの意図に反した誤用	259
はじめに	259
スミスの比喩の扱い	265
比喩の対象	267
必然性の規則	270
不用意な結論	274
第十三章 平和、軽い税、正義	283
はじめに	283
国家の第一の義務	285
国家の第二の義務	288
国家の第三の義務	290

教育と健康

公的収入

政府の失敗

公債

307 303 300 293

第十四章 アダム・スミスの遺産

はじめに

自由放任の終焉

貧困層をどうするか

おわりに

343 331 314 313

訳者あとがき

347

参考文献

索引

1 8

313

第一章 はじめに…今なぜアダム・スミスなのか

新古典派経済学の理論体系とその数理的扱いに十分に通じている経済学専攻の大学院生が『国富論』の数ページを読むと、彼らが学問的な訓練によって身に付けた経済学の方法とは全く異なる手法に直面する。続けて読んでいくと、そこには数学はなく、文体はいらだたしいくらいに難解で、みるからに長たらく、時には不明瞭である。また、明らかに関連性が疑わしい「脇道」にそれる傾向がみられることもある。特に、院生たちがよく対処している種類の問題に比べた場合にそのような傾向がある。院生たちがアダム・スミスの話法スタイルにすぐに共感することはなさそうだ。それでも彼の著書のなかには、院生たちのより奥深い問題のいくつかに光を当てると思われるものがたくさんある。また、現代理論をマスターする際に障害となる可能性のあるものにも出会うかもしれない。どうして現代経済学がそのような不確かな源から発展したのだろうか。また、なぜ彼が「経済学の創始者」であるといわれているのかと今日の経済学者が疑問に思うのは無理もない。

大成功に近いケインジアン・コンセンサスという当然視された考えがあふれんばかりに経済学者に注ぎ

込まれた第二次大戦後の明るく自信にみちた初期の時代は一九八〇年代までに衰退して当惑に陥り、多くの未解決の経済政策問題が再び表面化した。ひよっとするとそれと軌を一にしたのかもしれないが、経済思想史とその仲間の学問分野である経済史が難解な課題にそつと入り始めた。それらには教授職がなく、教授職を持つている者の退職を待ちながら研究が行われた。その一方で、数学者の大作は続き、それによって数量的思考に強い経済学者は「ハードサイエンス」の仲間に加えられるというあこがれの賞を得た。新しい千年紀までには、「自由貿易と保護貿易」という初期の論争が再燃している。また、市場対政府による管理はかつてと同じように国論を二分している。さらに、国内および世界の貧困問題に対する矛盾するもろもろの解決策は、知性的にも実践的にもアダム・スミスが残したところで行き詰まっている。今日の経済学の主な特徴は、基本的な現実の政策について合意がなく国論を二分していること、そしてハードサイエンスの装いにもかかわらず不安定な状態にとどまっていることである。

当然ながら私は、アダム・スミスを、彼の思想をそのまま二十一世紀の政策論争に転送することによって紹介するわけではない。そうではなく、社会と経済がどのように機能しているかについての彼の半ば隠された歴史および社会発展の理解の応用事例を教材として紹介する。私は、アダム・スミスを経済学が独立した学問分野になる前の政治経済学の重要な思想家として説明するので、読者には、懐疑的な人も関心のある人も、彼の著作の歴史的な面に焦点を当ててほしい。

経済学者の読書がアダム・スミスの著書からの陳腐な引用句に限定されており、彼は「見えざる手」の

理論家であり、「自由放任主義」の主張者であり、「夜警国家」の小さな政府を支持し、「自由貿易」の純粋な主唱者であるという問題のある考えに限定されているとすれば、アダム・スミスをより正確にみるようすべての経済学者に忠告する。

『国富論』は何について書かれているのか

『国富論』は経済学の教科書ではない。『国富論』は、アダム・スミスの世界観をより広範な歴史的問題に適用し描写したものである。歴史的問題とは、英国経済が緩やかではあるが着実な成長により持続的な改善の足跡を印すようになった原因は何かということであった。また、もし英国が近隣諸国ならびに北米植民地との国際貿易に対する政策スタンスに一定の変更をしていたならば達成できた可能性のある状況よりも、よりよい成績をあげることが阻んだものは何か、ということであった。『諸国民の富の性質と原因の研究』（以下、『国富論』）と題した彼の著書は、英国をケース・スタディとして使っている。

『国富論』は独特の性格を持っている。彼が提供する詳細は度を越しており、また、折にふれて繰り返される。そうした詳細のなかの例外的な話題が現代の教科書を飾ることはない。彼の二つの著作では、どの話題も古代ギリシャとローマの世界から決して遠く離れていない。それは、グロリア・ヴィヴェンザ（Vivenza, 2001）が含蓄のあるところをみせて指摘したように、彼の古典教育を反映しているのである。

スミスにとつての主要なテーマは、西欧が「失われた」商業時代を取り戻しつつあるという兆候を示していることの観察である。このことは、当時流行した文学および美術作品、建築様式、技術の伝播に明らかにみてとれる。技術伝播の多くは労働力を助け増大させたが、その様子はデウニ・デイドロによる多巻の『百科全書』のなかで図解されている (Diderot and D. Alembert, 1751-1777)。人口の大部分について一人当たり所得の変化がほとんどない状況で人口がゆっくりと増加したことは、全生産のうち生計に当てられた割合が着実に上昇したことを示唆していた。消費がゆっくりと増加しており、それは人口のうち中間および上層部の生計費を十分に上回っていたが、大多数の貧困層の一人当たり生計費は歴史的低水準のままであった。このことは、市場で取引される生産物が着実に増加したことを示唆しており、これは、歴史的な重要性をもつ何かが、最初は英国で後に西欧中で生じていたことの確かな兆候であった (Deane and Cole, 1967, 80; cf. Clarke, 2007)。探検航海と発見の目覚ましい物語は、既知世界の驚きの種を数倍の規模で増加させた。

スミスは哲学者の役割は「何もしないことではなく、あらゆることを観察することである」(WN 21)と考え、それを実践していた。それは、古典の資料に加えて、アメリカ、アフリカ、アジア太平洋へその頃旅行した人びとの物語、およびその当時のヨーロッパの記事を広範に読むことよって行われたのである。彼は、仕事場を訪れ、あらゆる階級の人びとの話を聞いた。彼が「窓の外を観察した」学者であったことはまったく確かである。彼はこれらの情報源から、生計の基本的な要素に生じている変化と、エリー

トの間にぜいたく品が増えているという兆候に気付いたのである。すなわち、全てではないが、多くの人がとの暮らし向きがゆっくりと良くなっていた。

アメリカで初期の狩猟時代にとどまっていた「未開人」のみじめな生活は、乱暴で残酷なヨーロッパの入植者と彼らが持ち込んだ病気によってさらに悪化した (Diamond, 1997)。それに比べれば、スコットランドの最も貧しい雇われ人の一般労働者とその家族の生活は、原始的な分業と市場の広がりによって、より満足のいくものであった (WN 24)。そのことから彼は、「富」は何から成り立っているのか」と問う。それは、お金のなか、あるいは、「生活必需品、衣食住の便利な設備、娯楽」という毎年生産される製品を利用する権利なのだろうか。彼は、富は後者である^{ゴールド}とみた。金は手段であり目的ではないからである。そして、「未開人」たちが入手することのできない生活必需品、衣食住の便利な設備、娯楽をヨーロッパの人びとがより多く手にすることができるようにしているものは何か」を問うた。スミスの『国富論』はこれらの二つの問に対する彼の答えである。それは、多数の典拠に基づいており、そのうちの一部は彼の私的蔵書や文通によるものであり、また、彼の多くの友人の蔵書から借りた資料によつたのである (Cott 101, 115-120, 132, 137)。

彼は準拠すべき先験的な一連の原則は持っていなかった。アダム・スミスが利用した関連する問題についての簡単なパンフレットは、内容豊富ではないにしても限定的な答えを提供した。そしてそれは、どうしようもないほど間違っていたというわけでもなかった。だいたいにおいて、彼は多くの間接的な情報か

ら合成された現在の限られた知識の価値を検討し、その結論を彼が想定していた聴衆に対して発表した。その聴衆とは議員と英国の政治的指導者層に影響力を持つ人びとであった。

彼は、ヨーロッパの国民国家は、重商主義の保護主義、商業の国内規制、植民地のような冒險的事业と取るに足らない目的のための戦争などといった「貿易についての嫉妬」という政治上の落とし穴に向かって漂流しているという。そしてそのことが、より高い成長率による商業の拡大と農業の改善の成果を十分に実現する力を減少させており、その結果として、とりわけ最も貧しい大多数の人びとに求められている富裕に向けてより速く進む力が弱められていると結論付けている。彼は原理的に政府の役割に反対したのではなくた。彼が反対したのは、重商主義的な考えの貿易業者、近視眼的な保護主義者、そして狭量な独占者の誤った教義に従って商業を損ない抑制するような政府の役割であった。

スミスは政治経済学の既存の知識を統合して、それを使ってローマ帝国の崩壊以降に西欧で何が起ったのかを説明しようとした。また、政府の現在の政策の何が富裕への進歩を妨げているのかをつきとめようとした。そして彼は、経済分析をそれらの変化をもたらした諸力の範囲内で定着させた (WIN 89, 111-112)。

スミスの考えは、一人当たりの生計が一定という昔からの問題を解決するという予想外の歴史的好機を、商業という「世の新たな慣わし」がいかにもたらしたのかについて明瞭な説明を提供した。昔からの問題というのは、人口の大多数である、生まれながらの「下級者」の生活条件は生計からみて静態的

であり、彼らの先祖は数千年にわたって絶対的な貧困に耐えてきたことである。また彼は、すでに比較的富裕な財産保有階級と成長が続くならばその階級に加わるだろうと彼が期待した他の多くの人びとが、生活の安定を持続できるようにするのに適切な政策を検証した。

彼の理論は、革命家のための声明ではなかった。また、即座にという意味での過激な変化を求める声明でもなかった。彼は、文章に「ゆっくりと徐々に」という句を添えたが、それは、感情的な反対を生じさせないことを確実なものにするためであった。彼は、働いている貧困者の生活水準が低いという状態は、慈善的な再配分によって変わることはなく、その変化は人口に対する働く人びとの比率が増加し、「生活必需品、衣食住の便利な設備、娯楽」の総生産を増加させるような経済的・社会的な成長によってのみ生じるだろうと結論付けた。

彼は情報源から得た詳細な証拠を『国富論』に詰め込んだ。それらは、主として彼の歴史に関する知識に根ざし、かなり単純な経済成長理論によって支えられたものであった。そして、『国富論』を英国議会制度の議員階級と議員に近い人びと、啓蒙運動の同僚「メンバー」、大きな影響力を持つ人物、そして、より広範な英国の読書家に提供した。また、英国以外の西欧諸国においても同じような人びとに提供された。それには、北米における英国植民地の人びとも含まれていた。

スミスは『国富論』を、教育を受けた階層の中・上流層が理解し話している言葉で語っている。彼は、特に「下層」階級に向けては話さなかった。それは、彼が死んだ一七九〇年の直後の時代に生じた事件が

示すことになるように、十八世紀の英国では非常に危険であったからである (EPS 309, 339; Rothschild, 2001)。「下層階級」ないし今日の差別廃止語でいうところの「下級 (inferior) 階級」が彼の思考からまったく外れていたわけではない。労働者の利益と現下の苦境が問題になっている場合には、彼は感情抜きで事実在即して語り、彼の明らかな同情がどこにあるかをそつと隠すのが常であった (WN 96)。

それでも時々、彼は「怠惰な」地主、「陰謀をめぐらす独占者」、「やかましく要求する」商人と製造業者に対してぶっきらぼうな非難をもって急に怒鳴りつけることがある。そして、彼は「支配者」と「放蕩者」を同意語とした。さらに、彼が感じていた「上流階級」の政治行動を支配している考えにある「不条理」に対するいらだちを一層激しくした (WN 144, 339-340, 434, 612-614)。

スミスの西欧史

アダム・スミスのすべての著作を通じて見られる最もはっきりとした特徴は、彼の歴史に対する考えである。それは、先史時代についてのまばらな記述を使って、「未開人」が「驚くべき」地上の現象を恐れていたこと (EPS 48)、「二人の未開人」が「必要品を互いが理解できるようにしようと」努力したこと (LRBL 203)、「未開人」の間には「同情と大目に見ること」が存在しなかったこと、そして「人生を極端に軽視」していたこと (TMS205, 288) を推察していることに見られる。また、彼は「交換する、

物々交換する、取引する性癖」は「理性と言語の能力の必然的な結果」であったとも推察している。(WIN 25)。

とりわけ、スミスの決定的な特徴は、将来をみるのではなく、過去をみることである。彼は将来についての予測をほとんどしなかった。彼は遠い時代から「現在」に向かって研究した。多くの場合は古代ギリシャ・ローマ時代からであったが、人類の「太古の時代」に遡ることも多かった。彼は旅行者の報告から、近ごろ発見された遠隔地の狩猟形態の生活の習性や慣習に通じていた。そして、当代の未開人を数千年前のヨーロッパ社会の標本とみなした。

彼は歴史理論を四つの「人類の時代」として表明し、それを「人類が通過する生活の状態、すなわち、狩師、羊飼い、農業、そして商業」と呼んだ (「I」)。人間の活動についての彼の「生活」理論は、個人の観点からは子供たちが幼児期を超えて生育し、子供を産むまで長生きできるように、生物学上生存に必要なものを上回る食糧の余剰を生産する方法を探し求める可能性と結び付いていた。可能性といったのは必然性ではないからである。食糧を増産できたところでは、一人当たり食糧消費の増加ではなく、おそらく何世代にもわたり人口が増加した。なんらかの理由で悪い状態が続いたところでは人口の水準は静態的になるか減少した (Clark, 2007)。世界の大部分が十八世紀までに狩猟時代以上に発展することに失敗したことは、進歩の必然性を保証する社会進化の「法則」が必ずしもあるわけではないことを示している。

スミスはローマ時代以降の歴史に関する知識から次のような疑問を抱くようになった。なぜ、人間の集

団の一部が最初の時代である狩猟から発展したのだろうか。なぜ一部の集団は彼らが達した羊飼いや農業の段階にとどまっていたのだろうか。そして、五世紀のローマ帝国の崩壊前に商業の時代を最初に経験した西欧の少数派が、なぜ、いま商業の復活を経験しているのだろうか。当時、西欧の商業の復活は十五世紀以降ますます明らかになっていた。

ローマ帝国崩壊後の「失われた」千年は、単なる偶発的な出来事ではなかった。それは、農業から商業への社会的発展に甚大な影響を与えた。こうした背景を知ることによって『国富論』の意味がわかる。同書は、その背景を何も知らない者には、単なる経済学の教科書としては、昔も今も、ほとんど意味をなさない。スミスは、商業が再び生じたプロセスについて、また、いったい何が再出現を推進したのか、自然に成長を誘発する商業が生じるのを阻止しているものは何かについて、あくなき探究をした。『国富論』をそのような哲学者の報告とみるのが大いに意味をなすのである。重商主義政治経済学の支配的な政策とそれに結びついた国民国家の管理が、『国富論』を十八世紀に出版された他の何ものよりも優れたものにしてるのである。

私の主たる焦点はスミスが実際に記述したことであるが、伝記的な事実もいくぶん加味した。また、彼が記述したと他の研究者が主張していることについても、彼の業績が内部で相互に関連していることの理解を容易にするために、時々簡単に言及している。